2019 年
フランス海外スタージュ報告書

フランス語教育スタージュ運営委員会編

日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館

本報告書は、2019 年 3 月 21 日〜24 日に実施された日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館主催のフランス語教育国内スタージュの修了者のうち、2019 年 8 月にフランス（ブザンソン）で実施された教員研修コースに参加した方々によるフランス海外スタージュの報告書です。

2019 年夏季ブザンソン研修の報告

井形美代子

この度フランス大使館の奨学生として 7 月 22 日から 8 月 1 日の約 2 週間、ブザンソンに位置するフランシュ・コンテ大学内の応用言語センター（CLA）において、他の三人の日本人教員と共に FLE の夏季研修に参加した。この研修には世界中からフランス語の教員が参加し、フランス語を効果的に教えるための方法や技術を学ぶことができる。今年の 7 月はフランス全土が猛暑に見舞われ、冷房施設のない大学や宿泊施設では参加者も研修をする教員もかなり体力を消耗したが、充実した貴重な体験となった。

1. プログラムの概要

研修期間中、週末を除く月曜日から金曜日の毎日、モジュール（module）と呼ばれる 1 時間半の授業を午前 2 つ、午後 1 つ、計 3 つを数ある選択肢の中から選び受講する。時間帯は 8 時半から 15 時までとなっている。また、15 時半からはフォーラムとアトリエが行われ、少なくとも研修期間内でフォーラムまたはアトリエの合計３つを選択しなくてはならない。さらに週末にはブザンソンの街から繰り出し、大型バスで移動する小旅行も用意されている。

2. モジュール

私が受講したモジュールは次のとおりである。

1 時間目：Dynamiser la pédagogie de l'écrit
2 時間目：Phonétique et pratique de classe
3 時間目：Pédagogie de l'oral : favoriser les interactions en classe

1 時間目に行われた「écrit の効果的な教授法」のモジュールでは、écrit の réception と production の活動において、学習者の écrit に対する欲求を掻き立て、書く能力に自信をもたせることを目的として、まずは我々研修生が様々な種類のテキストや言説を読み、グループワークで書く作業を行う。こうした体験によって、今度は実際に教師として授業を行う時に､想像力や創造性をフル稼働させながらいかに効果的に écrit の活動を行うことができるのかを考える授業だった。écrit の教授法とはいえ、oral と切り離すのではなく､oral と écrit を織り交ぜながら授業を進めていくことが重要なポイントとなる。例えば、「プルーストの質問表から着想を得た、思いのままに答える質問表」という écrit のゲームでは、学習者が「l'odeur préférée、le mot préféré, le mot détesté, ...le juron préféré」と書かれた質問表を手に教室中を歩き回って 2, 3 人の仲間にフランス語で質問をし、その返答をフランス語で書き留める。回答欄が埋まったら着席して、一人一人質問表を見ながら仲間の好きなものや嫌いなものを発表するのだが、これも oral を駆使しながら écrit を行うゲームである。また、研修生自身からも様々な遊びを取り入れた écrit の方法が紹介され、皆で共有することができた。

2 時間目に選択した「音声学と授業実践」のモジュールでは、発音矯正を授業に取り入れることを目的として、フランス語の母音・子音の体系、音声学・音韻論の基本的概念、ヴェルボトナル法を用いた発音矯正を学び、理論と実践を組み合わせながら授業が行われた。母語となる言語によって特徴的な発音の間違いがあり､フランシュ・コンテ大学に在籍しているアラビア語母語話者と日本語母語話者の学生に授業に来てもらい、学生の発音を我々が実際に矯正する実践を試みたりもした。また、我々研

修生の多くがフランス語母語話者ではないため、フランス語を正確に発音できるわけではなく、学習者への発音指導もさることながら、我々自身の発音を矯正することにも役立つ内容だった。

3 時間目の「oral の教授法」のモジュールでは、グループワークを活用した oral の教授法を学んだ。実際我々研修生もこの授業中、常にグループワークで作業をした。例えば、初回の授業で brise-glace をどう行うのか、各グループ内で意見を出し合い、他のグループのメンバーを学習者に見立てて実際に授業を行った。また、教授法の歴史を概観した後、用意されたいくつかの教科書の抜粋を読んでどの教授法に該当するのかを推測したり、「CECRL における oral」と称して、レベル A1 から C2 のテキストが用意され、どのレベルに相当するのか、またそれぞれのレベルにおける評価についても学んだ。さらに、oral のゲームは、学習者がグループワークにおいて創造的にコミュニケーション能力を駆使した活動ができるものとして有効であることや、RFI や TV5Monde のようなメディアを用いた oral 教授法についても学んだ。

3. フォーラム

私は３つのフォーラムに参加した。一つ目は「Le français par les gestes」である。フランス人特有のジェスチャーを知る授業で、時に言葉よりも雄弁に伝えることのできるジェスチャーを知ることは興味深いと同時に役に立つ授業だった。二つ目に参加したのは「Les chansons françaises」である。これは、フランス語で歌われている歌を実際に参加者全員で歌う授業であった。発音指導の上手な教師が電子ピアノを使いながら歌い、私たち参加者もそれに合わせて一緒に表現力豊かに歌う練習をした。ストレス発散にもなり、とても楽しめたので、これも是非実際の授業で取り入れたい。３つ目に参加したのは、「Visite culturelle : Musée du temps de Besançon」である。グランヴェル宮殿の中にあるこの「時の博物館」では、13 世紀に作られた初期のゼンマイ式時計から 20 世紀の原子時計に至るまでの技術的・科学的進歩をたどることができる。また、ブザンソンにおける時計産業が 19 世紀終わりに衰退するまで、どれほど地域住民の生活を支え豊かにしてきたのかということも紹介されて興味深かった。

4. 週末の小旅行：スイスとの国境まで

週末の土曜日にはストラスブールへの小旅行、日曜日にはスイスとの国境への小旅行が用意されていたが、すでに大使館が支払いを済ませていたスイスとの国境までの小旅行に参加することにした。ブザンソンの中心街を取り囲むように蛇行しているのがドゥー川であるが、この川はスイスにまで続いている。バスでドゥー川の上流近くまで 1 時間ほどかけて移動し、まずはジュー要塞を見学した。この 10 世紀の城塞は、軍事建築家ヴォーバンによって設計されたが、ヴォーバンといえば、ブザンソンのシンボルとなっている城砦を設計したことでも知られている。ジュー要塞は 17 世紀以降は牢獄として使われていたが、現在では武器の博物館にもなっている。とりわけ目を引いたのはフランスで最も深いと言われる、深さ 147m の井戸である。コインを投げて、そのコインが底に到着した音が我々のいるところまで上がってくるまでにかなりの時間を要した。昼食はオーベルジュでフランシュ＝コンテ地方のお料理に舌鼓を打ち、午後には遊覧船でスイスとの国境まで向かった。この小旅行では、猛暑が過ぎ去ったばかりとはいえ、雨が降っていたせいかかなり寒かったが、川沿いの緑あふれる自然を満喫でき、研修生たちとの友好を深める良い機会となった。

終わりに

２週間という短い期間にも関わらず、充実した実りの多い研修だった。モジュールやフォーラムで学んだこともさることながら、様々な国から来ているフランス語の教師たちとは毎日顔を合わせているうちに仲良くなり、フランス語を教える方法やアイデアを共有したり、毎日のように昼食を共にした。こうした出会いは、研修前には全く予想していなかったが、研修を終えた今でも交流は続いており、お互いの授業間の交流を実現しようと話しているところである。

写真

ドゥー川とブザンソン

２時間目のモジュールの最終日

ジュー要塞の井戸

フランシュ＝コンテ大学応用言語学センター夏季研修についての報告

河合　麻里絵

2019 年 7 月 22 日～8 月 1 日まで、フランス東部ブザンソンの中心街にあるフランシュ＝コンテ大学応用言語学センター（Centre de Linguistique Appliquée, CLA）で、フランス語の教員を対象とした 2 週間の研修に参加した。本研修は、日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館の共催により 2019 年 3 月にアンスティチュ・フランセ東京で行われたフランス語教育スタージュ修了後、大使館の派遣研修生として参加する機会をいただいた。以下、CLA の研修プログラムの内容を中心にその概要を報告する。

概要

CLA の夏季研修のプログラムは、フランス語教育に関する幅広いテーマを扱う授業の中から受講者が 3 つの講座を選択することができる。モジュール(Module)と呼ばれるこれらの授業は、8 日間にわたり毎日 1 時間半ずつ同一の講師によって進められる。選択肢の中には、「発音」や「文法」、「オラル」や「エクリ」の教授法を扱う講座、「Interculturel」や「フランス社会と文化」を扱う講座、「初等・中等教育」や「FOS (Français objectif spécifique) 」に関する講座、「ICT を活用した授業」を扱う講座など、多岐に渡るテーマが用意されている。

3 つのモジュールを受講後、夕方から短期間の授業からなるアトリエ (Atelier) とフォーラム(Forum) という形式の授業をとることができる。「Document authentique」を使用した授業を考案する講座や「シャンソンを授業に取り入れる方法」を学ぶ講座、1 回きりの講座では「RFI」や「TV5Monde」を取り入れた授業モデルを学ぶ講座、「ブザンソン市内の美術館見学」など、モジュールと同様に豊富なテーマの中から選択することができる。

本研修の講師は CLA の教員の方々に加え、フランス国内やヨーロッパ各国でフランス語を教えていらっしゃる講師の方々も多く、研修生もリビア、モロッコ、イスラエル、スーダン、タンザニア、マルタ、キューバ、ベネズエラ、アメリカ、ロシア、チェコ、フランス、インドネシア、韓国、日本など、世界各地から集まり、各国の教育システムやフランス語教育の状況について見識を深める良い機会となった。

講座内容について

2 週間の研修中にモジュールを 3 コマ、アトリエを 2 コマ、フォーラムを 2 コマとり、計 50 時間の授業を受講した。各モジュールは 12 時間で構成されており、8 日間に渡り下記の 3 つのモジュールに参加した。

1. Apprendre et enseigner la grammaire autrement　(M. Denis Roy)
2. Phonétique et pratiques de classe (M. Jean-Christophe Delbende, Mme Mariella Vitorou)
3. Pédagogie de l’oral : favoriser les interactions en classe de FLE (Mme Marie Thierion)

1 つ目のモジュールは、フランス語文法をドリル方式の練習問題だけではなく、様々な手法や媒体を用いて学習する方法について扱った。映画、文学、音楽、ネット動画を使用し文法の理解を定着させる練習問題の例や、グループでのアクティビティにクイズ要素を取り入れた練習問題などを実際に受講者が体験し、年齢や語学レベルを含めてどういった学習者に対して有効なアクティビティであるかをグループで話し合う形式がとられた。受講者の中には初等教育で第 2 外国語としてフランス語を教えている方や、マグレブ圏の大学でフランス語を教えている方もおり、同じフランス語教育の現場でも、レベル、学習目的、重点を置く言語能力が大きく異なり、そういった教育機関で勤務されている方々と意見交換をする貴重な時間となった。

2 つ目のモジュールでは、発音矯正の具体的なメソッドについて学んだ。1 週目は音声学の基礎知識を確認し、国際音声記号を使用してフランス語のイントネーション、リズム、アクセントの特徴を復習した。さらに、それらの特徴を身体の動きを使って学習者に教える方法を実際に体験した。2 週目は、発音矯正のメソッドである Méthode verbo tonale (MVT) について講義を受け、実際にフランス語学習者を対象に発音矯正を行う訓練をした。（母語が異なる各々の）学習者の間違えやすい音を分析し、その発音を音の高低と緊張度の 2 つの視点から矯正する練習を繰り返し行った。最後の 2 日間は、実際に CLA でフランス語を学習している日本人学生を対象に、MVT を使用して発音矯正を試みる機会に恵まれた。非母語話者講師としては発音矯正には不安や課題が残るものの、学んだばかりのメソッドをすぐに実践することができ貴重な経験になった。また、受講者の中にはリビアとスーダンといったアラビア語圏の先生方が多く、この授業をとおしてアラビア語母語学習者に多くみられるフランス語の発音の間違いを学ぶことができたことも有意義であった。MVT についてはこれからも深く学んでいきたい。

3 つ目のモジュールでは、オラル能力を向上させる様々なアクティビティを体験し、それらを授業に有効に取り入れるために必要な理論を学んだ。フランス語教授法の基本的な理論を確認し、実践とグループワークをとおして受講者に学びを促す形で 8 日間の授業が進められた。例えば、ヨーロッパ言語共通参照枠（CECRL）の A1 から C2 までの各レベルにおける口頭産出 (Production orale) 能力の定義を全体で確認した後、あるアクティビティがどのレベルの学習者に適したものかを 4 人 1 組のグループで話し合い、意見をすり合わせながら答えを導き出す作業を行った。教えている国や教育機関も大きく異なる受講者たちが、必ず話し合いをとおしてグループで 1 つの答えを出さなくてはいけないこの作業は容易ではないが、ユーモアと鋭い意見が飛び交い、あっという間に刺激的な時間は過ぎていった。他にも、グループワークをとおして自分たちで考案したオラルのアクティビティを発表する機会があった。これら一連の作業は、Séquence pédagogique の中でオラルのアクティビティを有効に用いるために必要な知識を固めることにつながった。「レベル」、「言語能力の目的」、「運用能力の目的」、「いつ使用すべきか」を常に念頭に置くことで、アクティビティを効果的に授業に取り入れることができるようになった。

これら主要 3 つのモジュールに加え、夕方は「RFI」、「Document authentique」、「シャンソン」を扱った授業に出席し、隈研吾氏が設計した FRAC（現代アート機関）を見学した。また、週末はブザンソンの城塞を訪れ博物館と歴史館を見学したり、CLA が開催するスイス国境の町へのバスツアーに参加したり、休日も文化的な発見に満ちた時間だった。

おわりに

今年、フランスの夏は猛暑に見舞われ、研修第 1 週目はブザンソンでも気温が 40 度近い日々が続いた。朝から夕方まで授業を受けた後は充実感とともに疲労感でいっぱいであったが、早朝と夜には街を散策する機会もあり、旧市街を囲い込むようにゆるやかに流れるドゥー川と青々と茂る木々の美しい風景に心身ともに癒された。今回、初めてブザンソンに滞在したが、小さくて美しい魅力に溢れる街だと感じた。

また、非常に充実した研修期間を過ごすことができたのは、ブザンソンで一緒に研修に参加された日本人研修生の方々や、現地で知り合った各国の研修生の方々との出会いのおかげである。

このような貴重な機会をくださった在日フランス大使館の皆様、日本フランス語フランス文学会の皆様、フランス語教育学会の皆様に心よりお礼申し上げます。

ブザンソン CLA 夏季スタージュについての報告

谷川雅子

本文書は、フランシュ・コンテ大学の応用言語センターCentre de linguistique appliquée (CLA)主催のフランス語教授法研修(スタージュ)に参加した報告です。

出発前

春頃から、大使館の萩尾さんがコーディネーターとして、書類の手続きを行なってくれました。特にトラブルなどもなく、スムーズに進んで良かったです。また、過去のスタージュ報告書が大変役に立ったので、一読を強くお勧めします。渡仏までに、自分が受講したい授業の目星をつけておくと良いと思います。

渡仏後

フランスでの滞在や移動については、全てキャンパス・フランスが手配してくれました。スタージュ の始まる 2 日前にフランスに到着し、空港のトラベレックス窓口で 200 ユーロほどの奨学金を受け取ります。詳細は事前に送られてくる資料に記載があるので、メールの添付ファイルを見落とさないように気をつけておくと良いでしょう。空港のトラベレックスは複数ありますが、キャンパスフランス提携のところへ行く必要があるので、自分の到着ターミナルとの接続を事前に確認しておくことをお勧めします。

到着後、パリの Nation 駅近くの Nouvel Hôtel に一泊(朝食付き)し、翌日にブザンソンまで列車移動しました。ブザンソン・ヴィオット駅では、CLA のスタッフさんが待機しており、スケジュールの説明や宿泊施設までの行き方を教えてくれ、2 回分の市内交通費がチャージされた切符をくれました。宿泊は、駅から徒歩 15 分ほど、もしくはトラムで数分のところに位置する Zenitude という名前のホテルで、キッチン、シャワー、トイレが個別についており、wifi や洗濯機も完備されていて快適に過ごせました。大学までは徒歩で 15—20 分ほどの距離でした。

スタージュ

スタージュ 開始日の午前は、ガイダンスがあり、トートバッグ、USB、ペン、パンフレットなどが支給されました。自分が希望するフォーラムとアトリエ(後述)の履修登録も、お昼頃行われました。人気のあるものはすぐに枠が埋まってしまうので、早めの行動を心がけたいです。

受講生(stagiaire)は、平日の月曜から金曜の 10 日間、8 時半から 15 時までのモジュール(module)を 3 コマ(1 コマ 1 時間半、1 コマ目と 2 コマ目に 30 分休憩、お昼休み 1 時間半)を受講します。15 時半から 17 時までは、フォーラムを 3 コマ(1 日で 1 コマ完結)、もしくはアトリエを 1 つ(3 日 3 コマ受講で 1 つのアトリエが完結)以上履修します。

私の参加したモジュール、フォーラムは、以下の通りです。

モジュール

1. (8h30-10h) : Phonétique et pratiques de classe (担当教員 Delbende Jean-Christophe)

発音矯正の方法を学ぶ授業でした。発音記号を自分たちで書いたり、母音の発音方法の復習することで、改めてフランス語特有の音声の難しさを再確認でき、自分自身の発音矯正もできました。発音矯正の様子を映像で学びました。例えば、狭い母音を

誤って広く発音する学生に対して、教員があえて、正解の発音より狭い母音で発音して誇張することで、発音を矯正できる様子などが学べ、興味深かったです。

このような発音矯正を、最終日付近で、初学者や他の日本人スタージュ受講生に対し実践しました。実際に自分たちで行うと、うまくいかないことも多く、あまり修正指導が多いと学生側も疲弊するので、完璧主義になりすぎないことも肝要かと思いました。

2. (10h30-12h00): Affirmer sa parole en classe de langue (担当教員 Delbende Jean-Christophe)

人前で話すことに対する心構えや、緊張をほぐす方法の実践を学ぶ授業でした。受講生が 5 名ほどと少なく、リラックスして臨むことができました。自分で話す際の癖(話す速度、声の大きさ、姿勢、視線の配分や身振りなど)を指摘してもらえ、どのように話すと良いかをアドヴァイスしてもらえました。また、聞き手が理解しやすいスピーチ構成を学び、最終日は、そのスピーチを実践しました。

欧米と日本では異なる点も多いことが、具体的にわかりました(例えば、日本では授業中に学生の目を注視し続けることはあまり行わないかと思いますが、欧米では最低 1 人の顔を 5 秒見つめるように指導されました)。日本での授業で活かすよりは、国際コロックで発表や発言などをする際の心構えとして理解しておきたい点を学べました。

3. (13h30-15h): Favoriser les pratiques créatives et ludiques en classe de FLE (担当教員 Beissel Francine)

遊戯の要素を取り入れたフランス語の教授方法を学びました。15 人ほどの国籍の多様な受講生がおり、小学校の教員の方など、各人の経歴も様々でした。A1 から C1 クラスまで使える方法が網羅的に紹介されて、実際に受講生同士で実践しました。ボールを投げ合ってリズムに合わせて互いの名前を呼びあうような簡単な遊びから、連想ゲームなどを経て、最終日付近では、与えられたトピックについてグループディスカッションへ進みました。終盤で学んだディスカッションは、例えば「人類滅亡の危機に瀕し、数人を生き残りとして選ぶ」といったトピックで、国籍、年齢、技能や経歴の異なる男女 10 人ほどから誰を選ぶのか論じる、と言った内容でした。C1 程度のフランス語運用力を想定しているように思われ、特に話すのを苦手とする日本人学生の授業で活用することは難しいと感じました。希望者には、Beissel 先生が USB に素材をコピーして渡してくれました。

全体的に、ある程度フランス語を話せる学生を前提とし、また、最低でも 30 分ほど要するアクティビティが多かったです。そのため、ここで学んだことを日本の授業で活用する際には、学生のレベルに合わせて内容を簡素化する作業が必要だと思いました。

フォーラム

1. Apprendre et enseigner avec TV5 Monde
   TV5がオンラインで公開している映像などを活用する方法が学べました。授業中に活用するより、独習向けの教材が多いと感じました。
2. Les chansons françaises
   現代のシャンソンが紹介され、歌詞の言葉遊びの側面を解説してもらえたりと、このフォーラムを受けなければ得られない情報が多く、有益でした。最後にシャ

ンソンをつかったディクテ教材を紹介してくれ、教育的にも配慮されていました。先生がUSBに素材をコピーしてくれたのも大いに役立ちました。

3. Visite culturelle : musée des Beaux-Arts et d'Archéologie de Besançon
   ブザンソン美術館を解説付きで見学できました。古代から現代に及ぶ建築、絵画、彫刻の幅広い作品があり、一度では見きれなかったです。個人的にもう一度来訪しました。
4. Parcours découverte : Besançon, encore plus de surprises !
   ブザンソンの歴史、文化の紹介に合わせ市内の建築物の成立の経緯などが学べ、非常に興味深かったです。

その他

休日を利用してイベントやエクスカーションが開催されます。セメスターごとにプログラムは異なるので、初日に貰う資料を参照すると良いでしょう。Haut-Doubs へのエクスカーションは、日本人受講生は無料となり、旅程、食事など充実しているので参加をお勧めします。イベントを通じ、諸外国の受講生との交流も図れるでしょう。

ブザンソンはスーパー、百貨店などひと通りのお店が揃っており、生活しやすかったです。日曜は午後 1 時ごろにスーパーが閉まりました。日曜も営業する個人商店がトラムの線路沿いにありますが、全体的に割高です。全体を通じ、30 度を超える日があったかと思うと、10 度くらいの日もあり、日によって温度差が激しく、天候の変化が激しかったです。風雨をしのげるレインパーカーなどの準備をしておけば良かったと後悔しました。

２０１９年夏：ブザンソン教員研修　参加報告

前田美樹

2019年8月5日（月）から8月16日（金）までの2週間、フランスの東部にある都市、ブザンソンにあるフランシュ・コンテ大学で開かれたUniversité pédagogique d' étéに参加させていただいた。その報告を行いたい。

今回のスタージュには、7月下旬から行われた前半に4名と我々後半に4名が日本から参加した。参加のためには、3月下旬に行われた東京でのスタージュに参加し、そこから希望者が面接を経て、選抜された。7月中は大学での仕事があるため、後半の8月5日から8月16日の期間を希望し、派遣が認められた。

ブザンソンスタージュ参加への流れを時系列に沿って振り返りたい。

本スタージュへの参加が発表されたのは、4月の下旬を迎えた頃であった。その発表を受け、まず確認したのはパスポートの有効期限であった。案の定有効期限切れの状態だったので、まずパスポートの申請を行った。次に航空券の手配である。これらの手配が終了次第、フランス大使館の係の方に渡航日程等を報告し、本格的な手続きへと移行する。

手続きを始めたのがゴールデンウィーク前後ということもあり、パスポートの申請などで手間取り、必要書類提出等の準備が進まずもどかしい時期もあった。書類のやり取りはメールとインターネットで行われる。渡航時にはすべての書類を印刷してファイリングした。ファイルはかなりの重みがあったが、印刷しておいてよかったというシーンが幾度かあったので、荷物の重量に余裕のある方は、印刷していくのをおすすめする。書類の提出が終われば、その後のやりとりはスムーズに進んだ。前期の授業を終え8月を迎える頃には、スタージュ参加が本当に楽しみで、心が踊った。

８月上旬フランスに向けて出発し、パリの空港に着いてまずしなければならなかったのは、空港にある両替所Travelexで、滞在費用を受け取ることであった。事前に去年、一昨年の参加者の報告書に目を通し予習していったのだが、受け取り場所を見つけることにてこずり、見つけてからも行列に並び、かなりの時間を要したので、今後行かれる方は心づもりが必要である。シャルル・ド・ゴール空港にはいくつかのTravelexがあるので、出発前に送られてくる書類で場所をよく確認しておいたほうがよいだろう。（ブザンソンでの受け取りも可能だったが、手続きは複雑で時間も要するので空港受取をおすすめする。）

お金を受け取ってから、パリのナシオン駅の近くにあるホテルへ向かった。空港からパリ市内への入り方はいく通りかあるが、直接ナシオン駅に行けるという、351番のバスに乗ることにした。空港でこのバス停を見つけるのも難しかったが、係員に聞いてなんとかバス停を発見し、直接運転手から6€分のチケットを購入し乗り込んだ。このバスは直通バスというよりは、空港から目的地まで、郊外の街を周り、沢山のバス停に止まるので、目的地に着くのに1時間ぐらいかかった。とはいえ一度乗ってしまえば、さほど混雑もしていなかったし、6€という安さであるし、普段なかなか見ることのない住宅街の風景を観察することもできたのでよかった。

ホテルに到着したのは夜の7時頃であった。ホテルはすぐに見つけることができた。事前に手配していただいたNouvel Hôtelという2つ星のホテルである。陽気なフロントでチェックインを済ませ、部屋に荷物を置いて、街をぶらぶらした。翌日にはブザン

ソンに向けて朝早めのTGVで出発しなければならないので、スーパーで水や夜ご飯を購入したり、メトロのチケットを購入したりした。翌朝、出発前にホテルの中庭で朝食をとった。そこで3月の東京スタージュで一緒だったメンバーと再会し、ほっとした。

朝食後ホテルをチェックアウトし、他の参加者とともにナシオン駅からメトロの1番線でリヨン駅に向かう。TGVの乗り場はヴァカンスシーズンということもあり、混み合っていた。出発15分前にホーム番号が案内され、改札（eチケットのQRコードをかざす）を通り、電車に乗り込んでブザンソンを目指した。出発しておよそ2時間でBesançon Viotte駅に到着。電車を降りると、日本の夏を思わせる暑さを感じた。駅にはプラカードを持ったスタージュ担当者が待機し、受付を設置して、参加者のためにチャージ式のトラムのチケットや地図を配布し、初日の集合場所や集合時間を案内してくれた。

駅からすぐの場所にあるトラム乗り場では、早速モロッコから来たという参加者に出会い、色々と話をした。駅から滞在先であるZenitudeというホテルへは、15分程度で到着した。到着は日曜の昼過ぎだったので、フロントが15時まで閉まっているということで、入り口のソファーで、パリであらかじめ買っておいたサンドイッチや飲み物をとりながら、時間を潰した。

フロントで手続きを済ませ、部屋の鍵をもらう。部屋にはキッチン（大抵の道具は揃っていた）、シャワー、トイレ、ベッド、テレビがあり、インターネットの電波も問題なく、大変快適であった。

渡航する前にネットやガイドブックで事前にブザンソンの地図をチェックしていたが、街の大きさはよくわからなかった。しかし街をブラブラしてみて、大変コンパクトな街であることがわかった。その後の滞在中、街のほとんどを徒歩で移動した。気候は、最初の1週間は30度を超える日もあったが、2週目からは20度前後まで下がったので、日本の蒸し蒸しした暑さを考えると、大変過ごしやすかった。また、聞いていたとおり、到着した日曜日は、スーパーはお昼で閉店、レストランやパン屋も閉店しているところが多かった。そこで、その日の夜は、中心部の数少ない営業中のレストランで日本のみんなで食事をした。明日からの授業に備えた前夜祭であった。

月曜日から、スタージュが開始した。初日は10時半にスタージュ参加者と教員が講堂に集まり、オリエンテーションが行われた。まず初めに、スタージュの概要が説明された資料と各自にIDが記載された参加証、そしてブザンソンを紹介する冊子等が入った袋が配布され、中身を確認したのち、教員の紹介と自己紹介、そして資料を見ながら、授業に関する説明が行われた。それが終われば、お昼休憩の時間まで、施設内で使用できるインターネットの設定、各自がこれから登録したいアトリエやフォーラム、エクスカーションの登録、日本で事前登録していたモジュールの確認等を行った。

事務的な手続きが終了すると、午後から早速授業が始まり、第一回目のモジュール、フォーラムに参加するという流れであった。初日には授業が終わったあと、チューターの先生とのミーティングがあった。日本からの参加者には、レバノンやエジプトからの参加者と共に、1人の先生が担当して下さり、生活に関してや学習に関して何か問題があれば、相談するようにという説明を受けた。

こうして、授業が始まったが、スタージュ中の主な時間の流れは次のようであった。

＜1日の流れ＞

- 8h　　ホテルを出発
- 8h20　　大学に到着
- 8h30～10h　　モジュール1時間目
- 10h～10h30　　休憩（毎日コーヒーやお菓子が振る舞われた）
- 10h30～12h　　モジュール2時間目
- 12h～13h30　　お昼休憩（近くのレストランやパン屋のテイクアウトを利用）
- 13h30～15h　　モジュール3時間目
- 15h30～17h　　アトリエないしフォーラム

（＊エクスカーションや文化イベントに参加する場合は17h30以降にプログラムが組まれている。）

＜授業について＞

モジュール (Modules)

　このスタージュの決まりごととして、3つのモジュールを事前に登録することになっていた。モジュールは2週間のうち、ほぼ毎日行われる。1回目の授業を受けてから変更も可能であったが、私は変更しなかった。登録したモジュールは以下の3つ。

8/5 ~ 8/16
- 1時間目：Intégrer le numérique dans ses pratiques de classe　（Caroline Langer）
- 2時間目：Motiver les ados à travers une pédagogie active（Mariela Vitoriou）
- 3時間目：Concevoir et animer des formations pour jeune public（Mariela Vitoriou）

　１時間目にはデジタルコンテンツを授業でどのように活用するのかというものを履修した。普段の授業では、インターネット等を用いることができる環境で教壇に立っているので、よりよい活用法を知るべく履修した。知らなかったツール（VocaroやKahoot !）の授業での使い方を学ぶことができたのは良かった。

　また、現在高校でフランス語を教えており、それとは別に普段小学生と関わることも多いので、3つのうちの2つは若者を対象とした、様々なアクティビテを通して授業をどのように活性化するかに重きをおいたものを履修することにした。２時間目は中学生・高校生を対象に、３時間目は６歳から１２歳までを対象としていた。先生は同じ方であったが、内容はしっかり区別されていた。音楽や発音を得意とされている先生だったので、発音の矯正の仕方やリトミック的なものをフランス語で学べたのは良かった。このようなものは日本ではなかなか学ぶ機会もないと思うので、貴重な体験であった。特に２時間目の授業では、同じ課題を抱えている様々な国籍の参加者と交流でき、モチベーションが高い方も多かったので、大変刺激になった。

フォーラム (Forums)

　モジュールに加えて、単発もののフォーラムを3つ履修するか、3日間続けて行われるアトリエを1つ履修することが義務であった。私が履修したフォーラム以下のものであった。

- 8/5 : Comment gérer son stress（Jean-Christophe Delbende）
- 8/7 : Visite culturelle : musée des Beaux-arts et d'Archéologie
- 8/8 : Parcours découverte : Besançon, une ville pleine de surprises !（Pascal Brunet）

1つ目のフォーラムは、スタージュ初日に開催されたものである。教師自身や学習者がストレスをいかに軽減して授業に臨むのかということに主眼が置かれたものであった。リラックスするための呼吸法などを実際に体験したり、みんなの成功体験を聞いたりしたことが、なかなか新鮮で面白かった。

2つ目は、実際にブザンソンの美術考古博物館に出向いて、学芸員の方からレクチャーを受けながら作品を鑑賞するというものであった。教室から出て文化を学ぶのは、よい息抜きになったし、ローマ時代の遺跡も数多く展示されていたので大変興味深かった。

３つ目のフォーラムは、最初に大学の敷地内に残っているローマ時代の遺跡についての説明を受けてその歴史を感じ、そこを出発点として、街中に点在する今も身近に存在している歴史的な彫刻や建築を見て回り、丘を登って教会を訪ね、最後にヴィクトル・ユゴーや映画のリュミエール兄弟の生家を巡るといった内容で、ガイドブックには載っていないブザンソン固有の歴史的遺物について知ることができたのは良かった。

アトリエ (Ateliers)

1週目に既にフォーラム３つを履修し、最低限の条件はクリアしたが、2週目にアトリエも１つ履修した。アトリエは3日連続開かれている講座である。履修したアトリエは次の通り。

- 8/12, 13, 14 : Didactiser un document authentique （Marie Thierion）

普段の授業でなかなか生きた素材を授業で活用できていないという課題を感じていたので、実際にどのように授業に取り入れていくのかを学べればと、履修した。

授業では、① document authentiqueを実際に用いてどのように授業を作っていくかというプロセスを確認（１日目）し、② 次に実際のニュースを教材にして、まず分析し、そして自分ならどのような授業を作るかを考え（２日目）、③ 最後に実際に教材を自分たちで見つけ、授業案を作成する（３日目）という内容であった。我々のグループは、ブザンソンを紹介するパンフレットを教材に選び、教材化を図った。授業はグループワークやペアワークで進められたので、それが良かった。他の参加者と交流することが相乗効果を生み、彼らの経験を共有することから色々と学ぶところがあったのが最も有意義な点であった。

文化活動 (Activités culturelles)

ブザンソンのフランシュ−コンテ大では、夏の間、世界から集まる語学学校の学生に向けて、様々な文化活動が用意されており、それに我々も参加することができた。授業の概要を記した冊子の他に、文化活動の冊子も配布された。その中に記載されていたいくつかの活動に参加した。参加したのは次のものである。

- 8/8 : 20h30~ MARIELLA / CHANSON FRANÇAISE

自分が２つ履修していた授業を担当していたMariela先生は、普段歌手活動もされている方である。その先生がブザンソンのホールでフランスの有名なシャンソンや、スペイン語の歌、また母国であるギリシャの歌やオリジナルの歌をピアノとバイオリンを伴奏にして歌われた。２時間半ほどのステージの間、会場は大変な盛り上がりを見せていた。地元の方も見にこられており、会場は満員であった。Mariela先生が有名な

シャンソンLa vie en roseを歌った時、鳥肌が立つほど素晴らしかった。同じ授業で仲良くなったノルウェー・エジプト・セルビアの友人ら一緒に鑑賞した。

- 8/11 : 8h30~ VOYAGE DANS LE HAUT-DOUBS
　オー・ドゥー地区の城塞の散策やフランシュ-コンテ地方の料理に舌鼓、またスイス国境の川を船で周遊し、スイス側に上陸、国境の橋を渡る。再びフランス側に戻り立派な滝も見ることができるという盛りだくさんのバス旅行。途中で天候が悪化し、びしょ濡れになったのもよい思い出。この旅行で様々な国の参加者と打ち解けた。船上でのカラオケ大会では、日本が誇るスタジオジブリの名曲を日本代表として若手のホープが披露してくれ、拍手喝采であった。費用を出していただけたのも大変ありがたかった。

- 8/13 : 17h30~ CROISIÈRE SUR LE DOUBS EN BATEAU MOUCHE
　ブザンソンの街を囲むように流れるドゥー川を遊覧船でひと回りするツアーであった。当初は第1週目に計画されていたが、荒天のため、一週間ずらして行われた。整備された運河を抜けるまでは一つのスペクタクルで面白かったし、川に出てからも、川の流れはとても穏やかで、気持ちよかった。普段は正面からしか見ることのない街のシンボルでもある城塞を船上から３６０度見ることができたのは格別であった。途中トンネルの中を通ったが、ライトアップも綺麗でまるでUSJに来ているかのようであった。

- 8/15 : 7h30~ VOYAGE À FRIBOURG (ALLEMAGNE)
　スタージュの終盤に、ドイツのフライブルクを訪れるバス旅行に参加した。フライブルクは、中世の面影を残した、歴史深い街であった。１３世紀から建築が始まった有名なミュンスター大聖堂を訪れたが、内部が素晴らしかった。そして同じ要塞都市として発展したこともあり、ブザンソンとの関係も深いようだった。また、日本の松山市とも姉妹都市であるという説明を聞いて、驚いた。街は活気にあふれており、沢山のおしゃれなお店や百貨店が立ち並んでいた。是非また訪れたいと思う場所であった。

　また、8/14 の夜には郊外の小さなバーを貸し切って打ち上げパーティが開催された。参加者が自分の国にちなんだ食べ物やソフトドリンクを持ち寄るという形式で、日本チームはモノプリで買うことができた日本のスナックやクッキーを差し入れた。この他にも、参加はしなかったが、大学の寮で行われたカラオケパーティや映画鑑賞会などが開かれていた。

　以上のように、授業が始まってからは、朝８時半から夕方の１７時までびっしりと授業、そして授業が終わってからや週末にも様々な活動が用意されていたので、２週間のスタージュ期間中はとても忙しかった。特に２週目に入ってからはスイス・ドイツ旅行の合間に毎日のようにイベントがあったので、個人的にブザンソンにある有名な城塞を訪れたりする余裕はなかった。
　そんな多忙を極める中、スタージュ期間中の楽しみといえば、ランチである。他の日本からの参加者とは、同じ授業はほとんど履修しなかったので、ランチタイムに日々の出来事の情報交換をした。大学の近くには、比較的リーズナブルで美味しいビストロや、人気のアジアテイストのレストランなどがあり、何度か足を運んだ。また

街の中心部にあるギリシャ料理の店では、タコスやケバブを食べることも度々あった。レストラン以外では、気に入りのパン屋を見つけ、そこの日帰りランチをテイクアウトし、公園で食べることもあった。このようにして、ランチタイムに色々な料理を味わうことができたため、このハードスケジュールを乗り越えることができたと思う。

まとめ

本スタージュに参加して最も有意義であったのは、世界中様々な環境でフランス語を教えている教師たちと交流できたことであろう。短い期間ではあったが、それぞれのバックグラウンドを抱えた教師たちと意見交換をし、学び合い、励まし合い、議論したことは、自分のモチベーションの刷新につながった。世界中のフランス語教師が、自分の普段の実践を見つめ直し、よりよい授業を求めて学ぶ姿には励まされたし、彼らは私の持っていないものをたくさん持っていた。そしてそれを惜しみなく私にも与えてくれようとしたことが、嬉しかった。

スタージュを終えて帰る頃には、またどこかで会いましょう！と笑顔で挨拶をし、互いの連絡先を交換し、そして今でも時々メッセージのやり取りをしている。自分は一人ではない、そして世界は広いが、志を同じくすれば、フランス語教育を通して、我々はとても近くにいることができるということが実感できたのが最大の収穫であった。

日本に戻り、新学期が始まった。早速スタージュで学んだことを自分なりにアレンジして普段の授業実践に取り入れている。スタージュで知り合った世界各国にいる友人たちに再び会う時には少しでも成長した姿を見せたい。そんな日がまた来ることを夢見つつ、毎日の授業準備がほんの少し幸せな気持ちでできる。

最後に、このような経験をさせていただくことができたことに感謝を申し上げたい。

夏季フランス語教育スタージュ報告書

牧　彩花

１．　はじめに

2019 年８月５日から 16 日にかけて，CLA（Centre de linguistique appliquée）において開催された夏季フランス語教育スタージュに参加させていただいた．本スタージュは 3 月にアンスティチュフランセ東京で開催された国内スタージュ参加者の希望者の中から選抜され，フランス大使館の援助を得て派遣していただいたものであり，二週間にわたり非常に充実した研修を受けることができた．今後参加される方々が活用できる情報を中心に，プログラムの概要や授業内容，ブザンソンでの滞在についてここに報告する．

２．　ブザンソン到着とスタージュ開始まで

8 月 3 日土曜の朝，パリに到着．空港で生活費などの給費(239€)を受け取るのだが，受けとり場所が第 2 ターミナルの両替所のようなところで分かりにくいため，事前に確認し，時間に余裕をもって空港に着く必要がある．そして，パリ市内に向かい，3 日夜は大使館の方がとってくれた Nation 駅の近くのホテルに宿泊．翌朝ホテルでの朝食で他の日本人のスタージュ参加者と合流し，パリの Gare de Lyon から共にブザンソンへ向かった．

ブザンソンに着いたのは日曜の昼 12 時過ぎで，駅に CLA のスタッフが来てくれており，宿泊ホテルまでの行き方，翌日の集合時間等を教えてくれた．駅からトラムに乗ること 15 分程で Zenitude というアパートメントホテルに到着．この際，注意が必要なのはホテルのチェックインが 15 時からであるため，それ以前に着くとホテル自体に入れない可能性がある．またご存知の通り，フランスは多くの店が日曜日は閉めているため，到着した日曜日に昼ご飯，夜ご飯を買えるところがほとんどない．ブザンソンで空いているファーストフード店を探すか，パリで食べ物を買って電車に乗るのが無難かもしれない．

３．　宿泊施設

我々が宿泊した Zenitude というアパートメントホテルは授業のあるキャンパスから徒歩 15 分程のところにあり，非常に綺麗で，バストイレ，ミニキッチン，食器，調理器具，タオルなど必要なものは全て揃っていた．部屋の掃除は滞在中一度だけ頼めるが，トイレットペーパーやごみ袋などの生活用品はフロントで常時受け取ることができる．一階に自動販売機，洗濯機などもあり，不自由なく二週間過ごせた．

４．　授業の構成と内容

授業は Module, Forum, Atelier の三つから構成される．Module は二週間継続して受講する必須のもので，8:30-10:00，10:30-12:00，13:30-15:00 の時間帯にそれぞれ異なる計三つの Module を選択することができる．事前にインターネット上で選択申し込みを済ませる必要があるようだったが，初日のオリエンテーションで申し込むこともできた（おそらく定員制なので事前に申し込んだほうが無難ではある）．初回授業に参

加した都合で，2 回目のみ変更は可能だがそれ以降は選択したものを最後まで受け続けることになる．

また，Forum は一回限り（一回 90 分）のもので，一週目の 15 時以降の時間帯にほぼ毎日異なる Forum が開講されており，好きなものを受講できるのだが，なかには定員制のものもある．Forum は，美術館見学や，ブザンソンの観光など，必ずしもフランス語教育に関連しないものもある。そして，Atelier は二週目の 15 時以降に開催されている三回続き（一日 90 分，3 日連続）の授業である（私はこれには参加しなかった）．

スタージュ参加者は必須となっている三つの Module のほか，三つ以上の Forum，または一つ以上の Atelier（三回続き）への参加が義務付けられている．以下，自分が受講したものの具体的な内容と感想を記す.

４－１．参加した Module の概要と感想

Phonétique et pratiques de classe　　Jean-Christophe Delbende, Mariela Vitoriou

音声学が専門の二人の講師が担当してくださった module で，参加者は 6 名（スペイン，タヒチ，セルビア，日本）．はじめの数回は発音記号やフランス語の発音，アクセント，イントネーションといった基本知識を確認し，その後，参加者のそれぞれの国の学習者の抱える発音の問題について具体的に取り上げ，問題が起こる原因や改善するための指導方法を検討した．そして，最後の三回の授業では CLA の A1,A2 レベルの留学生をクラスに招いて，発音矯正の実習を行った．少人数だったこともあり，非常に丁寧に指導していただくことができ，自身の発音を見直す良い機会になったほか，日本人学習者の発音の特徴，日本語からの影響などについても考えることができた．フランス語の発音は難しいので，ゼロ初級の場合はなんとなく終わらせがちであるが，上級になってもずっとついて回る問題であり，かつ筆記への影響も大きいため、早い段階から矯正することの必要性を改めて実感した.

Enseigner dans une perspective interculturelle　　Caroline Langer

言語を学習する上で避けては通れないのが文化であるが，この module は外国語を学ぶ上で学習者が触れる異文化に着目したもので，様々なアクティビティを通じて，文化とは何か，我々のもつ偏見やステレオタイプなどについて外国語教育という枠にとどまらず広く考えることができる機会であった．幸い，参加者の国籍も，セネガル，メキシコ，アメリカ，ブラジル，エジプト，セルビア，モロッコ，レバノン，イタリア，日本と多様であり，異なる価値観を持つ者が集まったため，様々な文化に触れ，活発な議論を行うことができた.

フランス語を学ぶ際に，フランス文化が異文化として現れるのはもちろんだが，多国籍のクラスでは他のクラスメイトの文化にも触れることになる．日本でフランス語を教える場合，日本人のみのクラスであることがほとんどなので，この問題は実感しにくいが，日本語学校や大学で日本語も教えている自分にとっては，学習者同士で文化が異なるということはよくあることだったので，この講義はフランス語教育よりむしろ日本語教育において参考になるものであった.

Se perfectionner à l'oral　　Caroline Langer

これもまた，オーラルに主眼をおいたもので，様々な授業で使えるアクティビティやゲームを実際に行い，その方法や改善策について話し合いながら，学習者がフランス語を(能力的かつ精神的に)話せるようにするにはどのように教えればいいのかとい

うことを検討できた．具体的な活動を学習者の立場で体験しながら知ることができたので，実践する際に気を付けることや問題点などが分かり，自分のクラスで応用可能かどうかの判断がしやすかった．様々なアイデアをもらえたという意味で充実していただけでなく，教師の目線や態度，クラスの雰囲気づくりなどについても参考になることが多かった．

４－２．参加した Forum の概要と感想

Comment gérer son stress　　Jean-Christophe Delbende, Mariela Vitoriou

学習者や教える側の教師でさえもクラスでの発話，活動にストレスを感じることがある．ストレスとは何か，何が原因で生まれるのか，いかにストレスなく授業に挑めるか，リラクゼーションの方法などを学ぶことができた．

Visite culturelle : musée des Beaux-Arts et d'Archéologie

市内にあるブザンソン美術考古学博物館へ行き，美術館の学芸員の方から様々な解説を受けながら美術館を見学できる Forum で，フランス語教育とは直接関係はないが，学芸員の方の詳しい解説をきくことができるよい機会だった．

Parcours découverte : Besançon, une ville pleine de surprises !　　Pascal Brunet

ブザンソン市内の歴史的な建造物や Victor Hugo のゆかりの地を見学できるもので，歴史学の専門家の方が解説をしてくださった．上に同じく，フランス語教育に直接関係はないものの，専門の方から説明を受けられる貴重な機会だった．

Chanson francophone　　Denis Roy

フランス語圏の音楽を知り，授業でどのように活用できるかを検討する講座．昔の音楽から現代のものまで幅広いフランス語圏音楽を知ることができ，かつ，音楽を通して学習者が自主学習できる様々なサイトの情報も得られた．

５．　授業外のアクティビティ

スタージュ期間中，授業以外のアクティビティが様々組み込まれていて，夜にはソワレやカラオケ大会，映画やコンサートなど，土日はブザンソン周辺の街へのエクスカーションなどがあった．定員制のものも多いので早めに申し込む必要がある．

Balade en bateau mouche à Besançon

ブザンソンを囲むドゥー川のクルーズ．一時間ほどのクルーズにもかかわらず，参加費はたったの 2€だった．授業後に学校から歩いて 15 分ほどのところに船乗り場があり，そこから一時間ほどかけて船からブザンソンをみてまわった．川から眺めるブザンソンの街並みや下から見上げる城塞はとても美しかった．

Voyage dans le Haut-Doubs

ドゥー川上流のスイス国境付近まで行く日帰りの旅行．参加費は昼食代も含め 60€だったが，日本人参加者にはキャンパスフランスが既に支払ってくださっていたようで，支払いの必要はなかった．このエクスカーションでは，17 世紀以降，監獄としても使われていた Château de Joux（ジュ一要塞）の見学，フランシュ＝コンテの郷土料理が食べられるレストランでの昼食，ドゥー川のクルーズ（クルーズの船内でのカラオケ大会 !?），スイス国境付近の散策などができ，非常に充実した内容だった．

Voyage à Fribourg

フランスとスイスの国境近くにあるドイツの街への日帰り旅行であり，参加費は 35€．到着後，一時間半程ガイドさんの説明を受け，その後は 4 時間ほど自由行動．街の中心にあるフライブルク大聖堂が有名で，内部の彫刻やステンドグラスは圧巻の美しさだった．人気のある観光地らしく，街並みは可愛らしく，お土産屋も多い．

6．おわりに

最後に，全体を通した感想を簡単に述べる．

本スタージュは，授業内容の充実度はもちろん，授業外のアクティビティも非常に充実しており，勉強と遊びのバランスがとれていたため，楽しみながら二週間を過ごすことができた．勉強以外の様々な活動が組み込まれていたからこそ，スタージュ参加者やスタッフの方々，先生方と交流できる機会が多々あり，素晴らしい出会いがたくさんあった．

3 月に受けた国内スタージュももちろん素晴らしい経験ではあったが，今回の海外スタージュならではの利点は，世界中から集まった様々な国籍のフランス語教師達と交流できたことである．国内スタージュや国内学会などでは，どうしても大学関係者に会うことが多いが，今回のスタージュでは，日本ではあまり会う機会のない，小学校，中学，高校でフランス語を教えている先生たちに出会え，異なる年齢，異なる環境におけるフランス語教育の現状を知ることができた．また，彼らの情熱，フランス語能力の高さは尊敬に値するもので，自分も精進しなくては…と良い刺激を受けることができた．

また，今回のスタージュはフランス語教育に関するものであったが，現在，日本で日本語とフランス語を教える自分にとっては，日本語教育で活かせる内容も非常に多かった．つまり，本スタージュの内容がフランス語のみに関わる表面的な内容

を扱ったものではなく，クラスの雰囲気づくりの方法や学習者との接し方，異文化理解といったような，言語を教える上での根幹的な課題を扱ったものであり，他の言語を教える際にも応用可能な内容であったということである．

二週間を通して，非常に有意義な時間を過ごすことができ，これから始まる後期の授業へのモチベーションも高められたように思う．このような貴重な機会を与えて下さった日本フランス語フランス文学会，日本フランス語教育学会，そしてフランス大使館の方々に心より御礼を申し上げたい．様々なご支援，本当にありがとうございました．

2019 年夏季フランス語教育スタージュ（ブザンソン）

はじめに

私が受講したのは 2019 年 8 月 5 日から同月 16 日までブザンソンで行われた CLA（Centre de linguistique appliquée de Besançon）によるフランス語教育スタージュである。以下受講した講座、および期間中の生活等について報告する。

スタージュ構成

当スタージュはいわゆる演習科目であるモジュールと、その他（講義、ブザンソンの観光案内など）の科目のフォーラムおよびアトリエで構成されている。各日午前中の二コマ（8：30〜10：00、10：30〜12：00）および午後一コマ（13：30〜15：00）のモジュールと、その後（15：30〜17：00）のフォーラムあるいはアトリエで成り立っている。モジュールに関しては、一限、二限、三限とそれぞれ別の科目を各約 4 教科から選択して履修し、それぞれ各週四コマ、二週間で各科目八コマ履修することになる。初日の 8 月 5 日は午前中の授業を行わず、午後からの授業となったため、三限の授業は木曜日に四コマ終了し、金曜日は午前中の二コマのみとなった。また第二週目は 8 月 15 日が聖母被昇天祭で祝日だったため全日休講となった。内容に関しては、テーマごと（発音、文法、会話、文化交流など）にどのように授業を進行するかを実践的に教授する、といったものであった。

その他の科目に関しては、一回のみ行われるフォーラムと、三日かけて行われるアトリエがあり、最低三コマ（三日かけて行われるものに関してはその三日分）履修することが求められた。すべてモジュールが終了した後の四限に行われた。それぞれの内容はモジュールと比較して多岐にわたっており、TV5 のコンテンツをいかに教育の場に活用するか、といった内容や、ブザンソンの美術館の案内、あるいは街並みの解説などフランス語教育からは離れたものまであった。

以下、私が受講したものについて、モジュールを中心に報告する。

■ Apprendre et enseigner la grammaire autrement

文法をいわゆる講義のような形で解説するのではなく、リスニングや演習、ゲームなどを通じて実践的に学ぶためのノウハウを教授する、という内容だった。例えば関係代名詞について学ぶにあたっては、各受講生に関係代名詞を用いてある人、動物、モノなどについてその名前を出さずに説明した文章を書かせ、それをみんなの前で読み、他の受講生が、その文章が何について語ったものなのかをあてる。こういった文章はすべての受講生が書くので、こういったクイズ形式を用いることで、関係代名詞を知識としてのみならず、文章を書くといったアウトプット、および他の受講生が読むのを聞くことによるリスニング、そしてクイズ形式で回答などのやり取りを行う上での会話といった総合的なフランス語能力の実践において関係代名詞の知識を生かすことができるようになる。また、『家なき子』をやさしいフランス語に書き換えたものを教材として用いることも提案された。児童文学作品ということで比較的親しみがあること、また、これも実際に授業内で紹介されたが、Youtube 等で実写化されたものが映像として広く出回っていることからそういった視覚資料などもあわせて利用できる点において有用であることが示された。

■ Enseigner dans une perspective interculturelle

多文化環境をどのように語学教育に生かすかという授業。とはいえ語学教育という点にはあまり重点は置いておらず、ありていに言えば多文化環境に触れてどのような態度で接するかということをテーマにした授業であった。当初、日本での語学教育はしばしば（見かけ上）多文化環境にないことが多く、その点を懸念して授業前に担当教官に問い合わせたが、母国語ではない言語を学ぶことと異文化について学ぶことは切り離せないこともあり、意味のないことではないのではないかとのことで、履修を決めた。

基本的なテーマは自分のそれと異なる文化を知ることで自らの文化を相対化する、というものであり、それを踏まえて議論を行うのが当授業の概要であると言える。もちろんその「異なる文化」にはフランスのそれも含まれ、例えばフランスのミュージシャンのヴィデオクリップなどを鑑賞しそれをもとに議論したり、二週間のブザンソンでの生活の中で気になったもの、ショッキングだったものを各々写真にとり、それが自らの文化を背景とした常識に照らしてどのようにショッキングだったのかをプレゼンしたりした。

フランス語教育という観点を離れても、受講生相互の文化的背景（レバノン、エジプト、ブラジル、メキシコ、アメリカ、セネガルなどからの受講生がいた）などを知ることができ非常に有意義だったが、一点気になった点があった。フランスのミュージシャンのヴィデオクリップ（曲は Oldelaf による Peine de mort）の中で中国人を両目の端を人差し指で釣り上げて示すシーンがあり、こういったシーンを含む映像を見せるのは、フランス語教育のみならずいかなる場でもふさわしくないのではないかと強く感じた。もちろん授業内でそのことを指摘したが、担当教官はあまりそのことを重視していないようだった。授業内では東アジア出身の者は私を含め日本人二人だけであり、ほかの受講生もこの点については問題視していないようだった。だがこれがムスリムやユダヤ人を指して行われるような所作であったらどうだろうか。私自身はこのような所作に対しては強い違和感を感じるが、仮にそれが含まれる映像などを紹介する際には必ず、こういった所作は極めて侮蔑的なものである旨を伝えるべきだと思う。

■ Se perfectionner à l’oral

フランス語教育の場において、受講生たちにいかにフランス語会話を促すかという点に焦点を当てた授業である。まずフランス語会話が困難になるケースを挙げ、それに対してどのような措置をとるかを議論した。また、会話を不可避的に行うようなゲームを多く紹介し、それらを実践した。また、各受講生たちからもそのようなゲームの提案をし、実際に行った。比較的少人数の授業では、このようなゲームは非常に有効だと感じた。多くのゲームにおいては定型表現があり、会話が困難な受講生はこのような定型表現に頼ることで会話を行うことができ、また会話が得意な受講生にあっては、そのような定型表現に頼らず自由に会話できるので、このようなゲームを行うことによって、受講生たちの間にある程度の能力の差があっても授業を進行できるという点で非常に有用だと感じた。また最後に各受講生にフランス語の詩や歌の一節を覚えさせ、その中の一つをいろいろな感情（怒り、恥じらい、尊大など）で暗唱するということも行った。私自身会話の授業を行う際、情報伝達という点に主眼を置き、感情表現に関してはおろそかになっていたため、感情表現としての会話の重要性を知る上では非常にためになった。

ブザンソンについて

ここではスタージュ以外のブザンソンでの生活について報告したい。

我々が滞在したのは 8 月の上旬で、同時期の日本の気候と比べたらかなり過ごしやすかったと言える。具体的には朝、つまり通学時は約摂氏 12 度で用意していた衣服ではやや寒さを感じた。ところが授業が終わるころ、日によって違うが 15 時あるいは 17 時ごろには朝と比べて 15 度以上は高くなっていたのではないだろうか。やや蒸し暑さが感じられた。今後参加する方々はそのあたり注意する必要があるのではないだろうか。

我々が宿泊したのは Doubs 川沿い近くにある Zenitude というホテル（兼レジデンス）で、各部屋に料理をするスペースはあったのだが、備え付けのものは最低限の食器や鍋のみで、まな板もまともな包丁もなく、何よりも調味料がなかったため（そして調味料を買うほど長期滞在ではなかったため）外食することが多かった。

2019 年度夏季スタージュ報告書

1.【概要】

本報告書において、2019 年 7 月 22 日から 8 月 1 日にかけてブザンソンの CLA（Centre de Linguistique Appliquée de Besançon）、およびフランシュ＝コンテ大学(l'Université de Franche-Comté)で開催された、「外国語としてのフランス語教授法（Français langue étrangère）」に関するスタージュについての報告を行う。なお、本スタージュへの参加は、在日フランス大使館の奨学金による助成を受けている。

2.【スタージュ・プログラム構成】

基本となるスタージュ日程は、休憩と昼食を挟みつつ、8h30-10h、10h30-12h、13h30-15h の 3 つのモジュールで構成される。各時間 6〜7 つのモジュールから 1 つのモジュールを選択し、2 週間同一のモジュールを受講する。初日のプログラム説明の際に配布されたパンフレットにはモジュールの詳細な内容は掲載されていないが、初回に出席したのちにもモジュールの変更は可能だった。

モジュールのあと、15h30-17h にフォーラムやアトリエと呼ばれる講習が用意されている。フォーラムは毎日一つのテーマを扱い、アトリエは 3 日間連続して同一のテーマが扱われる。講師からは、アトリエの場合は 3 日間出席することが望ましいと案内を受けた。2 週にわたるスタージュのあいだに 3 つのフォーラムないしアトリエを受講することが必須となる。

最終日には出版社からの教科書のプレゼンテーションが行われ、教科書や Web 上で使える教材についての説明が行われた。

3.【モジュール】

受講したモジュールは以下の 3 つである。

1. La société et la culture française aujourd'hui, par Jean-Marie Frisa

このモジュールは、文化や社会状況をフランス語学習者の知識や学習意欲にむすびつけることを目的としたものである。とくに地理的情報、暦に基づく文化、時事問題などが取り上げられた。まずは、初回の講義では、国境線のみが書かれたフランスの地図が配布され、講師の指示に従い、おおまかな都市名、主要な河川名、特徴的な気候を持つ地域を記入するという作業を行った。その後数名でグループを作り、講師より各グループに渡された別々の地図を用いてどのようなアクティヴィティが行えるか考えるという課題が出された。地図の種類は、地域の特産物が記載されたもの、大統領選挙の投票傾向が記されたもの、人口密度が書かれたもの、主要な交通網が書かれたものなど多様だった。これらの課題は、いわば、フランスの地理の持つ特徴の全体像を把握するアクティヴィティである。このアクティヴィティが有用である点としては、学習者が視覚情報としてフランスを認識できることであり、加えて単なる地名が記載された地図ではなく、地域の特産から政治的傾向まで異なった階層が重なった空間としてフランスを把握できる点である。

別日の課題では、祭日や主要なイベントの一覧が書かれたプリントが配布され、各祭日がフランスでどのような重要性を持つのかが説明された。それは単に L'épiphanie や Pâques などの比較的知られた祭日だけに終始しない。Le salon de l'agriculture が説明される際は、大統領選挙時に候補者は必ずこのサロンを訪れなければならず、畜産業者や農業者の支持を得なければ勝利することができないと講師から伝えられた。こ

うした一つのイベントからも、フランスという国が持つ特性が表れていることが示された。

その他にも都市と郊外およびコミューンの形成過程、各国の年齢別の人口比などが講義で使用された。こうした素材は学習者のフランスに対する理解を促進するためには非常に有効な手段であると考える。しかし、留意すべきは、テキストや学習配分がすでに決まっている語学の授業で、どのぐらい civilisation に時間を割けるかという点である。一つのアクティヴィティを行うだけでもおそらく 15 分以上時間が必要となり、授業進行に影響がある。したがって、授業に応用するためには扱うテーマの大きさや課題の量のバランスを取る必要があると考える。

2. Enseigner la littérature d'aujourd'hui en classe de langue, par Denis Roy

小説や詩作品など文学的なテキストを用いて、使用できる語彙を増やし、文章読解を行うための方法を提示する授業。文学作品を扱うため、基本的には文学作品が記載されたプリントに則って講義は展開された。だが、授業内では、一つの文学作品を使用する際に、それが映画化されたり、BD 化されたりしたものを用いることの有効性も指摘された。視覚教材は、文章を読解し内容を理解するうえで、非常に有益な情報となり得ることが説明された。

最初に用いられたのは、Erik Orsenna の作品でスペースとアポストロフが抜かれた全体が一続きになった文の塊を、分節して文章を再構成するという課題だった。あるいはアクセント記号が抜けた文章を読むなどの遊戯性が高い課題が行われた。難易度の高くない課題で、フランス語そのものに対する学習者の興味を引くためには適当なアクティヴィティだと思われる。

その他講義内で用いられたのは、Romain Puértolas、Agota Kristof、Chahdortt Djavann、Andrée Chédid などの作品の抜粋だった。これらの作品は *Littérature progressive du Français* の教科書に記載されている。抜粋には著者紹介と語彙についての解説が付与されており、学習者の理解を助けるものとなっている。講義内で扱われたのは、主にフランス以外の国の出身でありながらフランス語で執筆活動を行う作家たちだった。こうした選定をすることで、文章そのものは過度に複雑なものがなく、フランス語で小説を読むことになれていない学習者にとっても接し易い内容になっていると思われる。さらに小説の内容自体が、フランス語やフランス文化に対する著者の戸惑いや驚きが記されており、ある意味で学習者と同じ視点に立ったものだと言える。つまり、学習者が抱く感情と同質のものがそこには提示されていると言える。また、外国出身でありながらフランス語で作品を書く作家たちの文章に触れることで、フランス語が国を横断して使用される言語であり、その包容力および柔軟さを学習者が実感できる素材となっている。

この授業で得られたテキスト以外の映像や音声や BD を用いるなどのアイデアは日本でも比較的有効であり、文章の読解自体も、文章からフランス語を学ぶという、日本の学習者が普段行う授業に自然に接続することができるアクティヴィティであると思われる。課題も、文章の難易度を調整することによって、それぞれのクラスのレベルに合わせることができるだろう。また、文学作品を読むことに苦手意識を持つ学習者も存在することを考えれば映像作品を併用することが望ましいが、その場合は取り上げる文学作品が限られる等の問題があると考える。

3. Motiver les ados à travers une pédagogie active, par Mariela Vitoriou

日本では中高生にあたる年齢の学習者を対象にし、学習者からフランス語に対する

興味を引き出すことに焦点化された講義である。主に歌や体を動かすジェスチャーなどが用いられたアクティヴィティを通じてフランス語を習得する方法が提示される。
　例えば、参加者が輪の形に並び、自分の名前を紹介しながら一つジェスチャーを行い、次の人がそのジェスチャーを行った後に自分のジャスチャーを付け足し、その数が一つずつ増えていくというゲーム性のあるアクティヴィティが行われた。
　その他にも、まず短い詩作品を内容にあったジェスチャーを行いながら講師が朗読し、その後各グループに分かれ、その詩をアレンジしながら別のジェスチャーを行うというアクティヴィティを行った。最終的にグループで作り上げた詩とジェスチャーを他の生徒に対して披露する。したがって、グループ内では詩を作成するために話し合うなかで、何度も同じフレーズが繰り返され、単語は定着化させる。またグループ作業は比較的容易なため、各学習者からの自発的に発言する機会も得られやすい。
　また別のアクティヴィティでは、いくつかの個人的情報が付与された人物が記されたカードが何枚か配布され、それらの人物のなかから共通点を持つ二人を見つけるという作業を行い、最後にそれら二人の人物に扮して、共通点を活用しながら寸劇を行うというものだった。
　講義は以上のように、グループで話し合う作業を除いては、全員が起立した状態で進行された。そうした環境にすることで、身体を動かしやすく活発な発言が出やすい状況が作れるということが講師によって説明された。
　この講義では、着席した形で教科書に沿って文法などを勉強するという、日本の大学などで行われている授業スタイルとは極めて異なる方法論が用いられている。歌やジェスチャーを用いたアクティヴィティには新鮮な発見があった。その反面、日本の大学などに応用することに関して難しさも感じた。各アクティヴィティは、机を隅に寄せて教室の中央で行われた。日本の講義用の教室ではそうした対応は難しい。またゲーム性を帯びたアクティヴィティは、参加者の興味を引き出す場合もあれば、それが過度になると参加者の学習への意欲を削ぐ場合もあると感じた。この点は、学習者の年齢などにも左右されると思われる。
　上記の旨を講師に質問した際には、机の移動ができなくても、その場で起立するだけでできるアクティヴィティもあるとアドバイスを頂いた。この講義のポイントを取捨選択し、日本型の授業に適用する必要があるだろう。

4.【フォーラム】
参加したフォーラムは以下のものである。
1. Le français par les gestes, par Caroline Langer
　フランスで使用されるボディ・ランゲージを学ぶ講義。人差し指で目の下を引っ張れば、「私は信じていない」、頬を手の甲で撫でると「つまらない」、手の平の上でなにかをつまむようにすると「〇〇は怠け者だ」など、その他にも多くの今まであまり経験したことがないボディ・ランゲージを学習できた。
　また、復習の際に Kahoot というアプリケーションが使用された。これは簡単にクイズが作製できるアプリケーションで、生徒がスマホを持っていればクイズ形式で語学の学習ができるツールである。使用できる場面は限られるが、一つのアイデアとして活用したい。

2. Découvrir le Fonds Régional d'Art Contemporain de Franche-Comté / Cité des Arts
　ブザンソン市内にある、日本人建築家隈研吾によって設計された美術館であり、現代芸術を収蔵・展示している美術館を尋ねるフォーラム。また、制作のために芸術家

を滞在させたり、芸術に関するワークショップを行ったり、市民に開かれた活動を行っている。訪問した際は、「Vinyls & Clips」と題された展示が行われており、キュレーターである Guy Schraenen が収集したレコードジャケット・コレクションとさまざまなミュージシャンのビデオ・クリップが展示されていた。

フランス語教育に直接関わるフォーラムではなかったが、地方都市においても充実した内容を持つ現代美術館が維持されていることに関しては、文化・芸術についてのフランスの公的援助の充実さを実感した。

3. Visite culturelle : musée des Beaux-Arts et d'Archéologie

ブザンソン市内の中心に位置する美術館を巡るフォーラム。紀元前の石器からローマ時代のモザイク画に加え、Bellini、Tintoret、Cranach、Hubert Robert、Gustave Courbet、Théodore Géricault など貴重なコレクションが収蔵されている。学芸員の解説を聞きながら館内を回り、収蔵作品の歴史的価値について説明を受けた。特に印象深かったのはブザンソンで発見された石器や、モザイク画やローマ時代の装飾品である。ブザンソンが、紀元前から栄えた土地であることが示されていた。

直接的には語学とは関係を持たないフォーラムだったが、ブザンソンという土地に対する知識を増やすことは、フランスの文化的側面などを学習に関連付ける際には有益であると考える。

4. Découvrir le Musée du Temps et le Palais Granvelle

ブザンソンはフランスとスイスにまたがるジュラ地方から時計製造技術が伝わり、近年まで時計の生産地として有名であった。この時計博物館は、中世のブザンソンが俯瞰で描かれた絵画や、仏蘭戦争時にブザンソンが包囲されている絵画なども展示されており、ブザンソンの歴史を多角的に知ることができる。時計に関しても、近代的な振り子時計からトゥルビヨンを用いた複数の地点の時刻を示す高機能な時計など、豊富な展示内容だった。

5.【エクスカーション】

7 月 28 日の日曜日にはドゥー県のジュー要塞、およびヴィレ＝ル＝ラックにある滝を訪れた。ジュー要塞では、ガイドから要塞の歴史に関する説明を受けながら見学を行った。第二次世界大戦中に使われた設備や、ハイチ独立運動の指導者であるトゥーサン・ルーヴェルチュールが捕らえられた際に幽閉された牢屋などを見ることができた。一見すると山々に囲まれた物静かな土地のように見えたが、さまざまな歴史の騒乱に巻き込まれてきた土地であることを実感した。休養の意味合いもあるエクスカーションだったが、結果的にはフランシュ＝コンテ地域圏の歴史を学ぶことができた。

6. 【総括】

本スタージュに参加することで「「外国語としてのフランス語教授法」について、3 月に東京で行われたスタージュで学んだことに加えて、さらにフランス語教授法の知識を得ることができた。特に、音声教材や映像教材などを活用することで、さまざまな角度から学習に取り組めるという点に関して発見があった。とはいえ、3 月のスタージュでも指摘されたていたが、こうしたスタージュで学んだ方法をそのままの形で授業に適用することを目指すのではなく、生徒の傾向や教室の状態を加味したうえで、自らの方法論を作り上げることが必要だと感じた。それゆえ、本スタージュで学んだことを日本型の授業のなかに取り入れていくのが今後の課題だと考える。